

京都盆地の水脈

楠見晴重

関西大学工学部土木工学科教授
kusumi harushige

平安時代の人びとも地下水を利用していたが、当時の技術から推測すると、せいぜい数メートルの深さの井戸しか掘れなかったものと思われる。事実、京都市内で発掘された平安時代の井戸の深さは、すべて数メートルである。その深さまでの地質分布を調べることによって、間接的に平安時代の地下水の流れがわかるものと考えられる。

図4-1は、京都市内の七五五三本のボーリングデータから、深さ十メートルまでの地質状況を、粘土含有率別に図示したものである（黒は粘土、白は砂礫。粘土分が増え

るほど、灰色が濃くなっている）。

一般に砂の中を流れる地下水の速さは一秒間に約〇・〇一センチメートル。それに対して、粘土の中では一秒間に約〇・〇〇〇〇一センチメートルであり、砂と比べて一〇〇〇分の一のスピードとなる。砂の中を流れる地下水から見れば、粘土の中の地下水は、ほとんど止まっているようなものである。だから砂礫層が多く分布する場所が連続していれば、そこは間接的に地下水の水脈が存在する場所と考えることができる。

水は砂礫層によつて濾過され、また砂礫の間隙を通る間にミネラルを含むことが多くなり、良質な地下水となる。粘土層に比べて多量に採取できることから効率的である。これに対して粘土層に存在する地下水は、有機物等を含んでいることが多く、あまり良質とはいえない。現在でも、井戸から採取する地下水は砂礫層のもので、粘土層からは採取しない。質と量の問題ばかりではなく、粘土層から地下水を採取すると、地盤沈下を引き起こす原因になるからである。

この差が生じた背景として、次のような推測ができる。平安京が生まれる以前の話である。左京が築かれた鴨川西岸の地域は鴨川のため重なる氾濫で、厚い砂礫層が形成された。砂礫層には水を浄化する作用もある。ここに住んだ人びとはきれいな水を簡単に手に入れることができた。一方、右京はもともと湿地帯で、土壌には粘土が多く含まれる。平安京を造営する際には、ある程度湿地を埋め立てたのかもしれないが、それだけでは人は住めない。井戸を掘っても水が出にくい。出たとしても水質はよくない。こうした地下水の質と量の差が、右京の衰退と左京の繁栄の差につながったのではなからうか。

今度は左京を詳しく見てみよう。鴨川に沿う太くて白い砂礫の層が左京を広く覆っているのがわかる。これが鴨川の伏流水を運ぶ水脈だ。注目すべきは左京を流れる最も大きな水脈のルートである。最も太い水脈は下鴨から御所、そして神泉苑に伸びている。水脈は神泉苑周辺で流れを止め、地下の池のように大きくふくらんでいる。神泉苑の泉から地下水がこんこんと湧き出す理由がここにある。鴨川の水は

下鴨あたりから地下に潜り、御所の下を通り、最後に神泉苑で地上に湧き出していたのである。鴨脚家の伝説、そして京都の人びとの実感は、科学的に証明されたのだ。

それにしても何という古代の知恵であろう。古代の人びとは、下鴨が都の地下水の水源地であることを知っていた。その水が御所に向かって流れていることを知っていた。御所の周囲が水に恵まれた一等地であることを知っていた。そして神泉苑がけっして涸れることのない地下水の集積地であることを知っていた。われわれが最新科学技術を使ってようやくつかんだ事実を、古代の人びとは長い経験を経て肌で感じ取っていたのだ。

われわれは、無機質なコンピューター画面をいつまでも見続けていた。ようやく古代の人びとの叡知に追いついた、その実感を噛みしめた。

千年の叡知、そして現代の危機

平安時代の人びとは、この豊かな地下水をどのように利用していたのだろうか。それを知る何よりの史料が『扇面法華経』である。鳥羽上皇（一一〇三～一一五六）の皇后・高陽院が作らせたともいわれるが定かではない。扇型の紙面に法華経の文字が記され、その背景に、平安時代の水辺の風景が実に生き生きと描かれているのである。一五四ページの上図は泉の周りに集う人びと。右下の丸い輪は泉である。左には洗濯する女性、半身を露にして水を飲む女性がいる。三人の女性が楽しげに集う姿はまさに平安時代の井戸端会議である。その隣には桶に水を汲む女性たちがいる。かわいらしいのは一番右端の女の子。全身裸である。きつとお母さんに連れ

られて行水にやってきたのだろう。平安時代の庶民の暮らしが目の前に現れるかのようだ。一五五ページの上図はうって変わって貴族の邸の様子だ。立派な着物を纏う女性たちが両足を水に浸して遊んでいる。注目されるのは、家の構造である。軒先から外は池に張り出している。広島の厳島神社に見られるように、水の上に建物を造る技術自体は平安時代からあった。しかし都の真ん中にこのような水上の建物があったというのは寡聞にも知らなかった。京都盆地の夏は暑い。こうした邸で味わう水辺の涼は、平安びとの最高の贅沢だったのだろう。

平成十一年、この絵物語の世界が実際に発掘された。

発掘が行われた場所は、神泉苑にほど近い京都市立西京商業高校のグラウンド。ここから貴族の家の庭と池がそっくりそのままの形で姿を現した。池の大きさは東西十五メートル、南北四十メートルと相当の大きさである。さらに池の近くから、板を方形に組んだ井戸のような穴が見つかった。池に水をもたらす泉である。ここから地下水を湧出させ、水路伝いに池に流し込む仕組みだった。屋敷跡も見つかつ

た。発掘された柱穴から、建物は扇面法華経に描かれていたように泉にせり出すように設計されていた。屋敷の全容ははっきりしないが、さまざまな建物が池を取り囲むように配置されていたと考えられる。つまりこの邸の中心は池だったのだ。平安時代の人びとが水をいかに愛したかが読みとれる。池のまわりには梅や桜、ツツジ、楓など四季を彩るさまざまな樹木、アヤメや菖蒲などの水辺の草花が植えられていた。水は邸の外に排出されるようになっていたことから、常に入れ替えられ澄みきっていたと考えられる。清らかな水と四季折々の花々。なんと贅沢な空間だろう。

邸の主もわかった。発掘された土器に「斎宮」という墨書銘が記されていたのだ。斎宮とは、天皇に代わって伊勢神宮に奉仕する未婚の女性で、通常、天皇の娘の中から選ばれた。発掘された邸は、斎王が伊勢に奉仕する前、身を清めるために潔斎する場として建てられたと考えられている。

澄んだ水が邸の中央にあることによって、われわれが思いも寄らぬ効果もたら

されていたようだ。水に反射した日光が、室内の奥深くまで明るく照らし出すのである。その効果が生じるのは日の高くない朝と夕方。つまり、普通ならほの暗いはずの朝と夕方には室内が明るくなり、逆に日が高く暑い昼間には室内に日光が入らない。池のまわりには白石が敷かれていたというが、その石も照明効果を高めたことだろう。なんとも巧みな設計だ。

こうした池を中心とした邸宅は、これまで京都市内で数多く発掘されている。特に集中しているのが左京の京都御苑の周辺だ。このことから、この一帯が水に恵まれた場所であったことがわかる。それぞれの邸の池の水は、水路を通じて邸外に出される。そしてその水路が集まり、川となる。平安京にはそうした川が何本も流れていた。水は庶民の生活を潤し、物資輸送の水運にも利用された。

数えきれないほどの池と、都を縦横に流れるいく筋もの川。平安京は、まさに海なき水上の都だったのである。

しかし、都の水の歴史には二つの顔がある。水は人間の暮らしを潤す反面、時に

は逆に災いをもたらした。

白河法皇（一〇五三―一二二九）が「賀茂川の水、双六の賽、山法師はこれ朕が心に従わざるもの」と嘆いたように、鴨川は「天下三不如意」の一つに挙げられる暴れ川だった。長雨が続きと堤はすぐに決壊し、市中を水浸しにした。朝廷は平安京創建の後、天長元年（八二四）に防鴨河使（ぼんやがし）という鴨川の治水を受け持つ官職を作った。しかし、その後も鴨川は氾濫を繰り返した。山が近いために水の流れが激しく、それに持ちこたえるだけの築堤は困難だった。また、先にも触れたようにふだんは水量が少なくおとなしい川であることも、治水を困難にした。灌漑がたやすい鴨川河畔は絶好の農地であり、農民が堤を壊して田畑にする。朝廷は何度も禁止したが、農民も生活がかかっているのですやすすとは聞き入れない。お触れが出ればやめるが、時間が経てばすぐ戻る。こうしたイタチゴッコが続いたらしい。

鴨川の決壊は近代に至るまで頻繁に起こった。昭和十年（一九三五）六月二十九日の大洪水は、甚大な被害をもたらした。わずか九時間の内に総雨量二三五ミリも

の豪雨に見舞われ、川の水は堤防から溢れ出た。鴨川と高野川に架かる五十の橋のうち三十五が流され、全半壊した家屋は二九五、浸水家屋は二万四〇〇〇棟以上におよんだ。昭和十一年以降に河川の大改修が行われて堅固な護岸堤が設けられ、京都はようやく洪水の恐怖から解放された。ただし天がもたらす水量は誰にも予想できない。より大規模な洪水に備え、鴨川の河川改修は今も続けられている。

水の害は川だけではない。地下水もしかりだ。近代まで京都は生活のすべてを井戸水に頼っていた。では汚物はどのように処理されていたのだろうか。実は尿尿の大半は、そのまま家の一角に埋められていた。土には汚物の分解作用があるので一概に不衛生とはいえないが、都市が発展し、人口が過密化していくとそうとばかりはいっていらなくなる。特に伝染病が発生すると問題は深刻だ。地下水はさまざまな水脈でつながっているため、被害はすぐにひろがる。井戸だけでなく、梅雨の季節になると川や溝の水も溢れ、病原菌を運ぶ。夏になれば盆地の暑さが加わり、都の水路は疫病の温床になりがちであった。疫病は平安の時代から京都の人びとに

とって最大の敵だった。正暦五年（九九四）、鎮西（九州）から起こった疫病が京都を襲っている。『日本紀略』によると、四月から七月までの三カ月の間に「京都の死者過半、五位（位階）以上は六十七人」というからすさまじい。こうした記録が数限りなく残されている。

古代の人びとは、疫病の原因を怨霊の祟りだと考えた。その祟りを払うために「御霊会」を行った。御霊会を始めたのは朝廷だが、のちに庶民の手でも行われるようになる。中でも有名なのが、京都の夏の風物詩である祇園祭り。まる一カ月もの間続く祇園祭りのハイライトが山鉦巡行である。華麗な懸想品で飾られた山と鉦が都大路を練り歩く姿は、誰もが一度は目にすることがあるだろう。しかし巡行をよく観察すると、不思議な点に気付く。まず、宗教行事とは思えない派手な山鉦の装飾。向かう先は氏神たる八坂神社かと思いきや、町中をぐるりと一周するだけでまた元の場所に戻る。さらに祭りが終わるやいなや山鉦はすぐに解体されてしまう。まるで祭りの余韻を懸命にぬぐい払おうとするかのようだ。実はこれらの作法は、すべ

て疫病を払うためのしきたりである。過剰ともいえる装飾の山鉾は、神様の降臨のための装置。「神籬ひもぎ」という神の座である。きれいに飾り立てて、神様に立ち寄ってもらおう。ただし、来てもらいたいのはいい神様ではなく「疫神」だ。コンチキチンのリズムで知られる祇園囃子の鐘の音も、この疫神をもてなすための音楽だ。飾りとお囃子に惹かれ、疫神が山鉾にとりつく。市内をぐるりと回るのは、町中にいるさまざまな疫神を集めるためだ。そうして疫神を一掃した後で、山鉾を解体する。なにしろここには疫病の神々が宿っている。グズグズしてはならない。あつという間に解体し、神が宿った櫓などを焼き払う。こうした手順を踏むことで都から疫病が取り除かれるのである。

京都を代表する二つの祭り、葵祭りと祇園祭りは、ともに水と深い関わりがあった。葵祭りは天皇が都の水の守り神であるカモの神を祀る神事。一方、祇園祭りは庶民が水の災いともいえる疫病から逃れるために疫神を退治する祭りである。二つの祭りは、水の利と害に命運を委ねてきた京都ならではの年中行事であるといえよう。

二つの祭りは、平安時代から現在まで連綿と続く。その間、京都では何が変わり何が変わらずに残ったのか。

水との関わりだけを眺めて見ても、都はさまざまな紆余曲折を経てきた。近代以前の歴史の中で、京都を最も大きく改造しようとした人物は豊臣秀吉である。平安以来城壁を設けなかった京都の四周に、秀吉は「お土居どい」と呼ばれる土塁を張りめぐらした。これは軍事的な城砦であると同時に鴨川の洪水に備える防災施設である。高さ五十二尺、幅五間という立派な城壁だったが、現在は市内のごく一部にしかその跡を見ることができない。秀吉の遺産で今も残されているのが高瀬川である。

高瀬川は鴨川の西を通り、鴨川に注ぐ全長十キロの運河。秀吉が方広寺大仏建立の資材を運ぶために角倉了以に築かせた。これは、大正まで京都に物資を運ぶ水上交通路として利用された。秀吉は鴨川の東岸に、京都の副都心とも言えるような新都市を建造しようとしていたともいわれるが、高瀬川はその重要な水のインフラス

トラクチャーであった。秀吉がもう少し長生きをしていたら、京都の街は今とは大きく変わっていたかも知れない。

京都が最大の転機を迎えたのは、明治二年（一八六九）の東京遷都であろう。この年、京都は一〇七五年間君臨してきた日本の首都としての地位を失った。そのショックはいかばかりだったのか、計り知れない。よく言われる話だが、いまだに京都の年輩の方々は「御所はん（天皇）は東京に遊びに行っただけや」とユーモア混じりに意地をはる。そこには、千年の古都の住人にしかわからない心情が込められているのだろう。

明治の初期には、そうした気概と危機感が京都に満ち溢れていた。京都の人びとが目指したのは、東京より早く都市の西洋化、近代化を成し遂げることであった。そのための最大の事業が、琵琶湖疏水の開削であった。琵琶湖疏水とは、滋賀県の琵琶湖から京都市の中心部に至る全長十一・一キロの運河である。明治十八年に着工され、四十四年に完成した。目的は水運と水力発電、そして水道用水の確保であ

った。水運は時代の流れの中で目的を失っていったものの、発電所と水道は今でも使われている。京都の近代化は、この疏水があつて初めて成し遂げられたといえよう。平安京といい、豊臣秀吉といい、そして明治維新後の都市改造といい、京都を変えることは、すなわち盆地の水環境を変えることであった。

琵琶湖疏水により、地下水つまり井戸水にだけ頼り続ける暮らしは終わった。とはいえ、今でも伝統文化や産業に井戸水はなくてはならない存在である。太古の昔から京都の地下の水甕に蓄えられ、延々と人の暮らしを支え続けてきた地下水……。実はこの地下水が戦後の都市化の進展の中で、今、大きな危機にさらされている。

京都の地下水の危機が世間で騒がれ始めたのは、昭和四十年代のことである。きっかけは中心部における地下鉄の建設だった。工事が進むにつれて周辺の井戸水の水位は徐々に低下していった。京都の中心部には、飲食店や染色業者など井戸水に頼っている店が集中している。こうした店では、井戸水は生命線といっても過言で

対するこうした思い、こうしたこだわりが伝統の味を守っている。錆びた大きな鉄の滑車が、京都の伝統の重みを教えてくれた思いがした。

不公平になってはならないので、地下鉄工事について一言付け加えておきたい。地下鉄の工事は、確かに地下水に影響をおよぼす。しかしそれは自由水という浅い地層の水（サンドイッチ状の地層の一番上の層を流れる水）であって、地中深くに蓄えられている水にまで影響をおよぼすことは少ない。しかも地下鉄による地下水位の低下は一時的なものである。時間が経てば水位は復活する。けれども地下水を商売に使っているところでは短い期間であっても死活問題である。最近の地下鉄工事はそうした影響も考慮して、細心の調査を行っている。実際、地下水に対して、今、最も神経を使っているのは、地下鉄の工事関係者だということができるかもしれない。地下鉄の利便性を求める市民と地下水の動向に敏感な市民との狭間で働く人たちは、現代の科学技術の粋を注ぎ込むことで、この問題を乗り越えようとしている。しかしそれでも自然が相手だけに万全とはいかない。難しい問題だ。

はない。この先いったいどうなるのか、大きな社会問題となった。

先に登場した久保田豆腐店も、まさにその危機に遭遇した。地下鉄の工事とともに、毎日少しずつ井戸の水が減っていった。近所には、まだ水が出続けている井戸もあった。自分の店の井戸もいつか元に戻ってくれるのではないかと、毎日祈るような気持ちで井戸を見つめた。しかし水は減り続ける一方だった。もう店の井戸水では豆腐が作れなくなった。しかたなく近所の井戸まで桶を担ぎ、水をもらい受けて店を支えた。それでなくても豆腐屋の朝は早い。久保田さんは夜中に起き、水を店に運んだ。その時の惨めな気持ちを今も忘れないという。そして数ヵ月後、久保田さんの店の井戸は完全に涸れ果てた。

仲間の豆腐屋の中には、廃業する人たちも出てきた。もう都心では商売できないと、移転を決める人もいた。井戸水をあきらめ、水道の水に切り替える店もあった。しかし久保田さんはこの地の地下水にこだわった。『京都の水やから京都の豆腐なんや』という思いが捨てられなかったからだ。そこで井戸を深く掘り下げるこ

とを決意した。金にかかる。掘っても出ないかも知れない。不安は尽きなかった。業者に依頼してボーリングの鉄柱を深く地面に打ち込んだ。十メートル、二十メートル、水はまだ出ない。もうだめか。あきらめかけたとき、水がほとばしり出た。五十メートルの深さだった。久保田さんは、その時の思いをこう語った。

「もう水が上がった時には、ほんまやれやれと思いました。出たときはもううれしゅうてうれしゅうて。こんなうれしかったことはそれまでなかったぐらいでした。やっぱり豆腐は水が命。ええ水やないと商売をやめなあかんと思いましたけど。検査したらええ水やいうんで、ほっとしましたわ」

井戸は深く新しくなった。しかし水の味、豆腐の味は変わらなかった。古い井戸は安全のために埋めた。今はコンクリートでふさがれ、跡形もない。

久保田さんが「大事なもんを見せたげる」といつて持ってきたのは、錆びた鉄のかたまりであった。昔の井戸の滑車だという。井戸は埋めたが、これだけは捨てられなかった。江戸時代以来店の豆腐の味を支えてくれた井戸の形見だからだ。水に

地下鉄だけではない。鴨川の改修も地下水に大きな影響を与えた。下鴨に残るカモの一族・鴨脚家の泉もその影響を受けた。思い出していたきたい。鴨脚家の泉は、その水位に応じて形が変わる。一番少ないときは円形、少し増えると正方形、さらに増えると自然な池の形になる。今の水位はふだんは十センチほどしかなく、いちばん下の丸い部分にしか水がない。しかし鴨脚さんから昔のアルバムを見せられて驚いた。庭に滴々と水がたたえられた大きな池がある。これがあの泉だという。理屈ではわかってはいたが、これほど大きな池に変貌するとは思っていなかった。写真には、鴨脚さんのお父さんが釣りをする姿が写っている。琵琶湖でつかまえてきた鮎をこの池に放していたのだそうだ。それにしても今の泉の姿と比べるとあまりに水位が異なる。鴨脚さんの話では、昭和十〜二十年代の鴨川の護岸工事以来、水位が急に下がったのだという。その頃の写真もあった。確かに水位が下がって、井戸の形がはつきりと正方形になっている。はじめの写真から比べて、二、三メートルも水位が下がっていることになる。それでも、現在よりは二メートルほど高い。

さらなる水位の低下は、道路の拡張とアスファルト化、住宅の過密化など都市化の進展によりもたらされた。鴨脚さんの家の近辺には、かつては下賀茂神社の社家の邸宅が建ち並んでいたのだが、今はその大半が切り売りされ、近代的な住宅に姿を変えている。かつてはどの家にも鴨脚家のように禊の泉（井戸）があったのだが、今はもう鴨脚さんの家だけにしか残されていない。その鴨脚家の泉でさえ、水はもう涸れかけようとしている。そしてその水がかつてのように、庭を美しく飾る池の姿に戻ることは今後二度とありえないのである。わずか数十年の間に、京都の地下水はこれほどまで減ってしまった。鴨脚家の泉は、何にも増してその厳しい現実を如実に物語っている。鴨脚さんは言う。

「結局ね、よく人は自然に逆らうなと言うけれど、水位の低下は自然やないねん。人が減らしてんねん。昔の豊かな水は、鴨川の護岸工事に守られてあったわけやない。川蟻が育ち、蜚が飛び交う風景は、逆に護岸工事で消えた。そやからね、ほんまは自然に逆らわずにおったら、水位は保たれるやろう。風景も守れるやろう。せ

やけど、近代社会になるということは、やはり自然の成りゆき任せばかりではあかんわな。残念なことやけども。私一人の力ではどうにもできません」

鴨脚さんは寂しように庭を眺めた。最近はまだわからず「このまま泉を残して置いて、大きな穴が残るだけで危険きわまりない。いっそのこと埋めてしまつてアパートでも建てたらどうか」といわれることも多いという。しかし鴨脚さんは頑として拒んできた。

「この下鴨という賀茂川と高野川の中洲は、昔から水の豊かな神を祀る神域であつた。この地を私の先祖が、もう何代かわからんぐらいの長きにわたり、水豊かな聖域として守り続けてきた。でも今はこの一軒しかカモの社家の面影をとどめるところは残ってないんです。そりゃあ売り飛ばしてね、マンションにでもしたらお金は儲かるかもわからんけどね。そういうことを京都のみんながしてしまったら、京都という古都はなくなつてしましますわ。そやからね、あいつは偏屈やといわれるかもしれないけれど、この泉を守つていきたい。どんなに少ない水であっても、昔

の姿のまま残したい。これが私のできる限度です……」

鴨脚さんの最後の言葉は、ささやくように小さかつた。胸が痛んだ。

鴨脚家の泉の底をもう一度のぞいた。小さな沢蟹が数匹、水底を這っていた。きれいな水だ。目を凝らすと、水底から目に見えないほどの細かい泡が吹き出している。昔はみたらし団子のように大きかつた泡が、こんなにも小さくなつてしまった。しかし、今でも水は湧き出ている。そこで懸命に生きようとする沢蟹がいる。鴨脚さんをはじめ、この水を守ろうとする人びとがいる。そしてこの水が生み出した文化は今も輝いている。まだまだ、大丈夫だ。心の中で沢蟹に呼びかけた。

平安京を彩つたいくつもの川や泉は、もうない。無味乾燥なコンクリートの街並みが続くだけだ。しかしこのアスファルトの下には、今も水が流れている。そしてその水とともに生きる人たちがいる。今回の取材は、その姿に出会うための旅だったのかもしれない。

バスのアナウンスが鳴った。

「次ぎはセンボンデミズ、センボンデミズです」

思えばこのアナウンスの音がすべてのきっかけだった。そしてその後、取材を通してさまざまな音を耳にした。かすかな水音だ。友禅流しの川の音。作りたての豆腐からしみ出す水の音。裏千家の家元が汲み上げる若水の音。上賀茂の社家町を流れる清流の音。鴨川の源流・貴船の山の湧き水の音。祇園の花街を潤す白川の流れ。そして鴨脚家の井戸で戯れる沢蟹の音。

バスの中で耳を澄ませば、またあの水の音が聞こえてきそうな気がする。千年の都を潤したあの大地の水音が……。